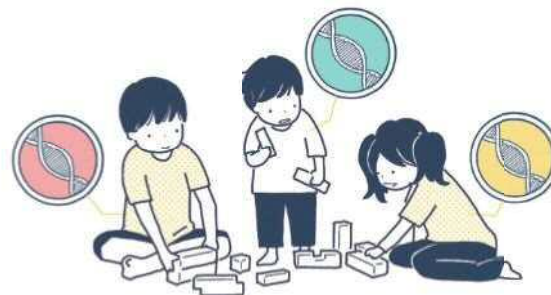


◆◆◆ こんな症状はありませんか? ◆◆◆

- A) 乳幼児期から突発的な痛みを繰り返している
- B) 痛みは、四肢(膝・足首・肘・手首が多い)に見られ、体幹(背中や胸、お腹)には症状が出ない
- C) 痛み発作が月に3回以上、3か月以上続いている(発作は、数分から数十分の痛みを繰り返す)
- 1) 家族に同じような症状を持つ方がいる(注:成人期以降に痛みは軽減する)
- 2) 寒冷、低気圧・悪天候、疲労のいずれかが痛みの原因となっている
- 3) 痛みに耐えきれず、日常生活上の支障(登園・登校ができないなど)や睡眠障害を伴う

A) B) C) 全てに該当、1) 2) 3) のうち2項目以上に該当したら、小児四肢疼痛発作症の疑いがあるかもしれません。

一度、医療機関に相談してみましょう。



しょうに し し どう つう ほっ さ しょう  
「小児四肢疼痛発作症」とは

どのような病気?



※上記のQRコードを読み込みますと、  
小児四肢疼痛発作症のホームページをご覧いただけます。  
( <http://www.med.akita-u.ac.jp/~ielp/index.html> )

厚生労働科学研究費補助金  
(難治性疾患政策研究事業)

新規の小児期の疼痛疾患である  
小児四肢疼痛発作症の診断基準の確立と患者調査  
研究班

## ◆ どのような病気？

「小児四肢疼痛発作症」は、乳幼児期から手足に突発的な痛みを繰り返す病気です。この病気は、血液検査やレントゲンなどの検査をしても異常はみつきりません。

### a) 痛みの特徴

痛みは下図のような部位に出ますが、はれたり赤くなったりすることはありません。背中や胸、おなかに痛みが出ないのが特徴です。症状が起こるのは不定期で、数分から数十分続き、一旦おさまり、また痛くなるといったサイクルを数回繰り返します。繰り返さないこともあります。月に数回以上の頻度で痛みがみられます。



### b) 発症時期

発症時期は正確には不明ですが、乳児期には夜泣き、理由もなく不機嫌になる、などがみられます。1-2歳ごろに言葉を話すようになってから気づかれることが多く、幼児期前半ごろまでに症状が出始めると考えられます。小学～中学生時には症状がはっきりとあらわれます。



### c) 痛みの誘因

「天気崩れる前」や「寒くなる時」に症状が出る 경우가多く、低気圧や寒さが痛みのきっかけになる傾向があります。梅雨や台風のときにも痛みが出ます。また疲労や寝不足も発作の引き金となり、運動会や遠足があった日の夜に痛くなることもあります。痛みのない時間には一切の症状がありません。



## ◆ 成長痛とは違うの？

この病気は「成長痛」によく似ていますが、成長痛よりもずっと症状が強い病気です。

「成長痛」は、膝やすね、ふくらはぎを痛がることが多い一時的な足の痛みで、幼児から小学校低学年によくみられます。夜寝る前などに痛みを感じても眠れないほどのものは少なく朝には痛みは消失しています。痛みのために学校に行けなくなるというようなことは基本的にはありません。

## ◆ 普段の生活や学校生活への影響は？

朝から痛みのあるときは登園・登校ができない、登校しても痛みに我慢できず早退した、保健室で休んでいた、体育に参加できなかった、など保育園や学校生活に支障がでることがあります。

おうちでは、なかなか寝付けない、夜間に目覚める、食事がすすまない、遊ぶこともなくごろごろしている、転げ回って痛がる、歩かない、など日常生活への影響があります。

## ◆ 原因はなに？

「小児四肢疼痛発作症」では、「痛みのシグナル」を適切に伝えるためのスイッチの一つ、「ナトリウムチャンネル 1.9 (Nav1.9)」のはたらきが正常よりも強くなっています。この変化は怪我などで生じるものではなく、体質的(遺伝的)にこのようなタンパク質ができてしまうのが原因です。

## ◆ この病気は遺伝するの？

私たちは親からそれぞれ遺伝子をもらうので、遺伝子の多くをペアで持っています。この病気はペアのどちらか一方の遺伝子に病的な変化(変異)があるときに発症します。

ほぼ全例で  
ご両親のどちらか一方に  
同じ症状があることが  
わかっています



## ◆ どうやって診断するの？

症状と遺伝子検査を組み合わせで診断します。この病気は遺伝する可能性があるため、ご家族に同じような症状の方がいらっしゃるかどうか(家族歴)が非常に参考になります。また、手足の疼痛をひき起こす他の病気を否定することも重要です。



## ◆ 治療法はあるの？

特別な治療はまだありませんが、保温、マッサージ、鎮痛剤のような対処によって痛みが和らぐことが多いようです。痛い時にその部位を冷やすとさらに痛みが増すため、温めたりさすったりすると緩和する傾向があります。

